市民広聴会「まちづくりほっとミーティング(第４回)」
会議録（概要）

＜テーマ＞どうする岡崎！家康公観光

日時	令和３年８月９日（祝）10時～11時35分
会場	図書館交流プラザホール
出席者	参加者（公募）62名 近畿大学教授　高橋一夫氏（岡崎市観光基本計画推進委員会委員長） 市長

１．今回のテーマについての説明

【市長】

・第４回目となる今回は、大河ドラマ『どうする家康』について取り上げたい。８月６日には広島原爆投下、９日は長崎原爆投下、15日には終戦を迎える。８月は、平和・戦争・先祖に思いを寄せる日本人にとっては特別な月。この時期に岡崎の歴史に思いを向け、いよいよ再来年に迫ってきた大河ドラマをどう未来の岡崎の活性化に結び付けていくか、多くの市民の皆さまから様々なお考えやアイデアをお寄せいただきたい。

２．文化・歴史を観光コンテンツにする難しさ、おもしろさ

【高橋教授】

・まず、家康公が主人公の大河ドラマをどうまちづくりに活かしていくかについてお話しさせていただきたい。

・忠臣蔵はご存知だろうか。大学生のうち忠臣蔵を知っていると答えたのは10%程度しかいない。先日、広島県のとある町を訪れた。その町には浅野内匠頭が切腹した後、御内儀が一生を過ごした庵が残っている。「この庵を観光振興のコンテンツの中核において頑張りたいと思っているがどう思うか」と問われた。もちろん浅野内匠頭の御内儀がどのような一生を過ごしたのか、関心をお持ちになる方も当然いらっしゃると思う。しかし忠臣蔵の名前も知らない若者が増えてきた現代において、歴史や文化を観光の素材として取り扱っていこうと思ったとき、消費者側の成熟度がどれほどあるかが非常に重要な問題となる。

・家康公は歴史の教科書にも載っており、今回うまく使わない手はない。なぜ大河ドラマが人を呼ぶのか。当然テレビの影響力はあるが、日本全国の皆さまがたと同一の体験を同時に行える。観光客はドラマに描かれたイメージを実際の場として体験したいと思ってお越しになる。平均で通常の150%、過去に滝田栄さんが大河ドラマで家康公を演じたときは通常の５倍にもなったという話も聞いた。非常に強いパワーがあることが分かる。

・舞台となった土地を訪れても雰囲気がなければ、観光客をがっかりさせてしまう。セット

に映し出される町は現在と違うため、視聴者がイメージを再構築する場が必要だ。大抵はドラマ館を作りドラマのイメージをもう一度感じながら、その周辺に残っている資源を巡り歩いてもらい観光の活性化に繋げている。

・ポスト大河を考えることも重要ではないか。2023年には新型コロナウイルス感染症は収束し、一定数のお客さんに来ていただけることは間違いないだろう。しかし、テレビドラマを取り上げた観光構造は一時的なものになりがちで、翌年は大幅な観光客の減少が見られる。放映後の継続的な取り組みを前提に、市民・事業者と盛り上げていくことが必要である。実在した家康公ゆかりの人・物・場所を取り上げ、ボランティアによるガイドツアーの取り組みなど、具体的なイメージを考えておくべきだ。

・ドラマ館は拠点施設であり情報や資料の収集が行われる。市民のガイドによって家康公ゆかりのお寺や四天王ゆかりの場所を巡り、八丁味噌やいがまんじゅうなどの食文化を知り、実際に口にできるお店、伊賀八幡宮など関連するスポットに来ていただいて、地域全体が支え育てていく仕組みづくりを意識していくことが必要だろう。地域の皆さまが主体的に参加し、ドラマ館を中心に地域全体への回遊を目指す取り組みを今から考えることが、2023年とその後を考えた時、岡崎市の観光インフラになっていく可能性があるのではないか。

・皆さまは岡崎にどういう想いを持っていらっしゃるだろうか。市民の想いが外に繋がってこそ、岡崎に対するイメージが皆さまの考えるアイデンティティと一致する。これが観光まちづくりにも大きなプラスになっていくだろう

・2023年を飛躍の年として、新たな観光まちづくりに向けて動いていこう。『どうする家康』を活かして観光プロモーションを展開し、観光資源や集客資源をもう一度整理し創出していこう。過去の様々な事例分析から、地域の隠れた物語や人に感動する知的体験ができる新しいツーリズムが岡崎から発信されていく必要性を感じる。本日は、ぜひ皆さまとともにあるべき姿を考えていきたい。

３．意見交換

●大河ドラマ効果に期待するもの

【市長】

・まず多くの人が岡崎を訪れ知っていただくことを期待したい。

【参加者Ａ】

・家康といえば静岡市、浜松市が黙っていない。岡崎市としては他市に先駆けてNHKと交渉し、岡崎公園内に大河ドラマ館を設けて子役の衣装や小道具を展示したい。ドラマ館では、「どうする家康」「どうする岡崎」と“どうする”というキーワードと掛けて展示してもよい。さらに岡崎で一番にトークショーなどを催せるように、配役発表があれば速やかに交渉しておくことが良いのではないか。

【市長】

・『どうする家康』というタイトルから、困難に直面して判断を迫られ苦悩する若き日の悩める家康公の姿が多く描かれるのではないか。北は北海道から南は九州まで、どこに行っても家康公ゆかりの土地はある。その中でも岡崎が取り上げられることになると、若き日の家康公にスポットが当てられることを大いに期待したい。その旨は、ＮＨＫ名古屋支局や愛知県知事にもご協力をお願いさせていただいた。浜松市・静岡市と連携しつつ、岡崎市へ誘致する取り組みを行っている。切迫感を持ちながら、これからも力を入れていきたい。

【参加者Ｂ】

・今回は、松本潤さんという若い俳優さんが家康公を演じ、脚本家も明るい作品を作られている方なので、新しい家康公をイメージされると非常に期待している。ドラマ効果によって特に若い方が岡崎に来てくれるのではないか。

【市長】

・恐らく１年を通してドラマを見続ける方は上の世代のかたが多いのではないか。そういった中で、若い人たちに若き日の家康公、ひいては岡崎に感心を持っていただくためには、ドラマを核としてさまざまなツールを駆使していかなければならない。例えば、岡崎の観光伝道師でもある東海オンエアさんの吸引力はすごいものがある。東海オンエアさんを通じて岡崎を訪れる方は若い方ばかりだ。ＮＨＫや関係各所にお許しいただける範囲で仕掛けづくりをしていかなければならない。具体的なアイデアをお寄せいただきたい。

【参加者Ｃ】

・岡崎の観光事業者の半分以上は市民対象のサービスである。大河ドラマの効果によって市外県外から訪れる方々のマスを増やしていきたい。そのためには宿泊だけ、交通だけで独立するのではなく、横断的なコミュニケーションができる組織としてお互いがお互いのコンテンツ・商材をプロモーションできる仕組みをつくる必要がある。宿泊が食を紹介する、食が体験を紹介するという形で、岡崎の魅力を複合的に紹介し合って少しでも滞在時間を延ばしていく。そのようにビジネスとして成立させていく。今は市内の方が中心であっても、これを機会に市外県外の方が一層増える仕組みをつくることが大切だ。

【高橋教授】

・非常に分かりやすいご指摘だと思う。例えば、岡崎ニューグランドホテルへの宿泊が分かっていれば、午後４時に市内の飲食店の紹介がスマートフォンにプッシュ通知で届く。あるいは翌日の午前中が空いているのであれば、さまざまな旅ナカ体験をお知らせする。このようにデジタルトランスフォーメーションをどのように活用できるが重要だ。

・このような繋がりを、デジタルを活用しながら効果的・効率的にやっていく方法を２年間で作り上げていこう。最近ではクラウドで提供されているデジタルサービスもある。そ

れをうまく利用し観光消費をしていただき、その消費が農業などにも回っていくような仕組みを目指したい。

【参加者Ｄ】

・徳川家康が誕生した岡崎城、幼少期に過ごした法蔵寺、さらに大樹寺には身長と同じ位牌がある。岡崎には歴史遺産が多く点在している。岡崎と25年関わっているが、非常に観光事業が下手だと感じる。2006年にも『純情きらり』という朝ドラで八丁味噌の産地が観光スポットになったが、今は駅前や岡崎城内に出演者の手形が残っているだけで、当時を知っているかたも少なくなっている。“アフター大河ドラマ”をキーワードに、点と点を線で結んで持続可能な歴史観光を目指していただきたい

【市長】

・岡崎城、岡崎公園の観光ボランティアの方々から真っ先に出てきたのは、「トイレをきれいにしてほしい」「授乳室が欲しい」というお客さまの声だった。大河ドラマをきっかけに岡崎を訪れたかたに、安全で衛生的なトイレだった、授乳できる施設が整っていたという思いを持ってもらえれば好印象を残す。

・家康公をはじめとする岡崎の歴史は、とても１日で回りきれるものではないので、リピーターになっていただかなくてはならない。岡崎を訪れる方々への思いやり・おもてなしの気持ちを表していけば、二度三度、観光客に優しい岡崎市を訪れたいという気持ちになっていただけるだろう。

【高橋教授】

・近畿大学のある東大阪には全く観光のイメージがない。2019年にラグビーワールドカップが開催された時、花園に外国人のかたが多く訪れるだろうと予想したため、「東大阪の観光に貢献しているか」とタクシー運転手に尋ねたところ、いぶかしげな雰囲気が漂ってきた。同じ質問を京都の運転手さんにすると「最近は中国のかたも増えてきたので中国語の勉強をしている」という答えが返ってきた。

・観光客からお金をもらっているという行為が、観光に対する意識付けになる。さらに言うと持続・発展可能性をしっかり見据える際、お迎えするだけではなく、観光客の皆さまがたにお金を使っていただきWin-Winの関係を作っていきたい。そうすることで市長のおっしゃるおもてなしが、より進んでいくと思う。『どうする家康』が、そのきっかけになればいい。

【参加者Ｅ】

・ＮＨＫに岡崎のどこを取り上げてもらえるかと考えると、やはり生誕地である岡崎城、その他には桶狭間の戦い以降に逃れてきた大樹寺が結び付くのではないか。もう一つ歴史的なことを考えれば、甲州の戦いの場面が多く放映されると考えるが、その他は恐らく飛ばされてしまう。放映後は現地確認が一番に求められるので、安城市、岡崎市、豊田市、

松平町を一体化したバス周遊を含めた継続的な観光地を作り上げてほしい。

【市長】

・脚本家の古沢さんが岡崎・三河一帯を取材されたと聞いているが、どのような印象を持たれたのか大変興味深い。松平が発祥であり、家康公の筋で言うと安城松平ということもある。事実、岡崎の観光推進課には豊田市や安城市と連携を呼び掛けるお声掛けをいただいて取り組んでいる。

・先日、知事から来年秋頃にオープン予定のジブリパークと岡崎観光をセットで回ってもらったらいい。それには、愛環を使ってもらえばいいのではないかという話もあった。そのように周辺との連携はとても重要である。

●大河ドラマを軸とした岡崎観光について

【市長】

・岡崎には温泉があるわけでもなければ、滝山東照宮も日光や久能山に規模ではかなわず、言葉は悪いかも知れないが物見遊山的な観光の力ではなかなか太刀打ちできない。岡崎ならではの新しいツーリズムを作るという意味で言えば、歴史文化遺産を核として岡崎が持つ家康公以前の飛鳥時代からの古い歴史にも触れていただくきっかけになればよい。

・八丁味噌を代表とした食文化にも触れていただきたい。ものづくりの中心地でもあるので産業観光にも結び付けていきたい。季節によっては花火や桜など、セットで仕掛けを作ることで年間を通して岡崎を観光地として楽しんでもらえるのではないだろうか。

【高橋教授】

・ドラマ館は、家康公以外にも関心を持ってもらえるような情報や資料収集の拠点施設として活用したい。ＮＨＫを中心に様々な衣装を展示していただけるが、市全体の情報、資料の収集ができると地域全体が家康公を中心に観光を支えてくれる。2023年以降のことを考えて必要な仕掛け・仕組みに繋がる。ドラマ館を拠点にしながら、うまく流れができればよい。

【参加者Ｆ】

・ドラマ館や美術博物館を利用した企画展をぜひ誘致してもらいたい。他の地域のドラマ館では入場者が100万人を超え、経済効果300～500億という数字も出ている。家康行列への参加も絶対に必要である。

・家康公にゆかりのある場所は、寺社仏閣が多く、なかなか観光整備ができていないという実感がある。これを機に観光資源として整備していただきたい。さらに観光資源になっている地域を巡回するバスルートを作り、一般の方々がワンマンバスとして利用してもよい。手軽に観光地を巡れる仕組みがほしい。

・観光を軸とした市民参加型のプロジェクトを１年かけて募集し、ドラマに対する意識醸成を図ってもらいたい。

【市長】

・具体的にどのようなものを作っていくか。それほど時間のない中で進めていかなければいけない。企画展も社会文化部と徳川記念財団とで話し合いを行い、準備を進めている。

・例えば、東京の「はとバス」にはたくさんのコースが設けられている。通常の観光コースだけではなく夜のナイトスポットを組み込むことで、地方や外国から来たかたが安心して観光地を訪れられると人気が出た。早朝型・夜型など、それぞれに合わせたコースを考案できるのではないか。

【参加者Ｇ】

・私は中国からの留学生。中国人にとって日本の観光名所は、東京・京都・大阪、映画で有名になった北海道である。しかし徳川家康は中国皇帝と同様に尊敬され、映画でも紹介される有名な日本人だ。

・観光に対する提案を２つする。１つ目は、大河ドラマと同時に中国の若者やビジネスマン向けに徳川家康を中心にしたゲームソフトを開発・販売し中国人観光客を増やすこと。

・２つ目は大河ドラマと同時に岡崎を舞台にした映画を制作してはどうか。難しいかもしれないが、できれば私も出演してみたい。

【市長】

・大事なことをあらためてご指摘いただいた。家康公の生き様・考え方・哲学にスポットを当てることが、岡崎の良さ・深みに切り込んでいくことにも繋がる。人間教育、ビジネスモデルを作るという意味合いにおいて、家康公の生き方を学び、皆さまにも知っていただきたい。その礎になったのは岡崎であるというポイントをしっかり押さえていきたい。

【参加者Ｈ】

・小学校で徳川家康の銅像について調べている。観光推進課のかたが、岡崎市にはシンボルがないと話していた。私は徳川家康が好きで歴史についても楽しく調べているので、それを聞いて不思議に思った。岡崎といえば徳川家康で、その徳川家康が産まれた岡崎城は岡崎のシンボルである。岡崎城の観光ボランティアになって魅力を伝えたい。

【市長】

・岡崎市のシンボルは岡崎城である。青年会議所の絵画コンクールで小学生に自由に絵を描いてもらったところ、間違いなく岡崎城、その次に花火・桜が入っていた。

【参加者Ｉ】

・ストーリーに沿って線で結んでいくことも大切だが、次は面にしていかなければならない。ヨーロッパにはシティーカードというものがあって、レストラン・美術館・交通の割

引サービスが付いている。同じように美術博物館、子ども美術博物館などと結び付け面にしていくことで、リピーターや長期滞在に繋げていきたい。それだけの観光客に耐えられる宿泊施設がどれだけあるかは、少し心配ではある。

【市長】

・シティーカードやスマートフォンへのプッシュ型のお知らせは必須である。それによって岡崎の良さを幅広く知っていただく。

・ご心配されていた宿泊施設については見方を変えて、体験型のキャンプをしてもらうことで岡崎の面白さの一つに加えていけるのではないか。

【参加者Ｊ】

・私は浜松市出身で浜松城のガイド経験がある。松本潤さんや脚本家の古沢さんは若者に人気だが、若者の観光となると聖地巡礼がメインだ。聖地巡礼は舞台のワンシーンを切り取って主人公になりきるというイメージだが、何でもないようなシーンが観光スポットになる。

・浜松の聖地巡礼では舘山寺温泉に宿泊して、浜名湖や遠州灘のグルメや周辺観光を楽しむ。確かに岡崎でキャンプも良いとは思うが、年配の方々のために宿泊所をメインにして考えたほうがよいのではないか。

【参加者Ｋ】

・岡崎を取り上げたテレビ番組を見ていて気になっていることがある。岡崎・三河・安城のイントネーションに非常に違和感を感じる。2023年の大河ドラマや、せめてロケ番組では出演者の皆さんに正しく「岡崎」と発音してほしいという思いで、今日はここに来た。

【参加者Ｌ】

・岡崎生まれ岡崎育ちで岡崎のことは知っているつもりだが、社会人になって県外に行くと岡崎がどこにあるのか知らない人がいて驚いたことが何度もある。今回は、良いチャンスではないか。歴代の市長は神社仏閣、歴史の岡崎だとおっしゃっていたが、実際に名所旧跡を訪れると駐車場・トイレがなく非常に不便に感じる。今のうちから市が関与して駐車場や回遊するバスルートを整える必要がある。

【参加者M】

・家康公検定を受けた。問題集に出ていた場所を実際に巡ってみたが、建物は立派でも説明が足りない。置いている備品がぼろぼろで読むこともできない。だから観光客が少ないのではないか。もっと分かりやすく内容が読み取れる説明文や絵・ポスター等を作るとよい。上ばかり見て下を見ていない岡崎観光だと感じ、良いところがたくさんあるのにもったいないといつも思っている。

・私は手話通訳観光ガイドを目指して頑張っている。全国のろうあ者の人に観光に来てい

ただけるような市にしていただきたい。

【参加者N】

・民泊のAirbnbというサイトがあるが、体験を売るというサービスもある。そのようなものも充実させたらどうか。観光ボランティアは年齢制限があるので、やりたい人が体験を売れる基盤づくりを市としてサポートしてほしい。

【高橋教授】

・このような場に参加させていただく機会は多いが、これだけ意見が出るのは初めてで、皆さまの家康公に対しての熱い想いを感じた。

・皆さまのご意見を３つにまとめた。１つ目はターゲット、年代によって様々な楽しみ方があるということである。例えば、バス周遊の観点が抜けているというご指摘があった。あるいはドラマのワンシーンを切り取ってなりきるという全く違う楽しみ方があることも分かった。家康公はオールターゲットに向けて、どのような楽しみ方が提案できるかを考える機会だと教えていただいた。

・２つ目は、実証実験の場として使うということである。観光とまちづくりは近接してきている。例えば、観光施設を見やすく分かりやすくしていくためには当然お金が必要だが、入館料・拝観料を少しアップすることはできないのかなど、様々な実験が必要となる。ルートバスにしてもそうだろう。これを機会に2024年以降はどうするのかを、市・市民・事業者みんなで考えることで持続可能性が担保される。

・３つ目は、規制緩和を徹底的に活かすということである。宿泊施設が少ないというご指摘があったが、例えば空き家対策も含めた日本版アルベルゴ・ディフーゾ（分散型ホテル）という方法がある。これはフロント設置義務の緩和によってできるようになった。さらに難しい試験を受ける必要のあった有料ガイドも現在は誰もが行える。国の規制緩和によって誰もが恩恵を手にすることができる制度が幾つもある。そこから岡崎にはまるものを探していくことも持続可能性に繋がる。

●大河ドラマ後に残したいもの

【市長】

・岡崎を訪れ良さに触れ、岡崎で働いてみたい、住んでみたいという思いにまで、大河ドラマの効果が及んでほしい。

【参加者O】

・岡崎は古くは古墳時代から、中世・近世と長い時代ずっとまちづくりに取り組んできた。今の市民は、今の考え方・技術を用いてQURUWA戦略によるまちづくりをしている。今回、それを良いタイミングで伝え、実際に今の岡崎に来て・体験してもらえる良い機会に

なる。

・2026年にはアジア大会もある。どちらにも力を入れれば、住んでもらえるまちになるのかもしれない。そんな機会になればよいと思う。

【参加者Ｐ】

・５年前に北海道から岡崎に来た。高知県のひろめ市場、千代保稲荷神社、台湾の士林夜市、ドイツのクリスマスマーケットなどは何度でも足を運びたい。

・岡崎には地元民で賑わっているスポットがないのが寂しい。地元民が訪れたいと感じるポイントはお得感だと思う。割高なイベントに毎週行こうとは思わない。近場の人がふらっと行きたいと思えるようなスポットがあれば、観光に繋がるのではないか。

・私自身は歴史に興味がないが、熱海のお祭りでは一般の方々が電車など様々なところで甲冑を着ていて、私もお祭り気分に浸ることができた。例えば、市民も土日は浴衣を着て生活するなど、岡崎市に行けば年中お祭りだという雰囲気は簡単に作り出せるのではないか。小学生から文化を醸成し成人の日には浴衣をプレゼントするなど、幼い頃から楽しみながらＰＲするという暮らしづくりに巻き込んでいきたい。

・乙川沿いが大好きなので、週末に行きたくなるスポットにしてもらえると嬉しい。

【参加者Ｑ】

・岡崎市内を歩いていると、観光案内板が少なく統一されていないことが気になった。職場ではベトナム・ネパール・イスラム圏のかたも見かけるようになったので、案内板の多言語化に取り組んでほしい。

【参加者Ｒ】

・観光とは光を見ること。光は国・地域の人々の生き様、あるいは先祖から受け継がれてきた風土であり、それをトータルで見せるのが観光だろう。その観点が不足している。一番重要なのは、私たちは何を発信したいのかという哲学の問題だと強く思っている。

・今回の大河ドラマと照らし合わせてみれば、家康の姿を借りて私たちの生き方、先祖の在り方について、市の強い哲学の発信をお願いしたい。岡崎は素晴らしい学者や名誉市民を輩出している。学問成果に依拠して議論を積み上げ、それを観光ベースに乗せ持続可能性に繋げてほしい。

【参加者Ｓ】

・SDGsというキーワードをよく耳にする。このタイミングで岡崎を環境都市としてアピールするのはどうだろうか。豊田市にはトヨタ自動車、岡崎市には三菱自動車がある。例えば、水素ステーション、スマートグリッドなど様々な取り組みをしていると思うが、大企業と連携をするのはどうか。家康公ならこうしただろうというアプローチもできるのではないか。

【市長】

・岡崎には５年では味わい尽くせない歴史がある。歴史や文化はもちろんのこと、鮎めし街道、わんPark、おかざき世界子ども美術博物館などたくさんの資源があるので、様々な楽しみ方をしてほしい。

・カーボンニュートラル、地球温暖化対策など、岡崎は日本で一番の環境都市を目指して準備を進めている。

・観光の神髄は地元の人が地元のことを、なぜ、どれだけ愛しているかを、外から訪れた方々に感じてもらうことだ。岡崎の哲学は家康公である。「厭離穢土 欣求浄土（おんりえど ごんぐじょうど）」という言葉に表されているように、平和で美しい世の中をつくっていきたいという家康公の思いを、今だからこそもう一度思い起こし大切にしていかなければならない。平和追求都市であり、教育や文化が花開く礎を築いた岡崎だという市民の誇りを訪れた方々に感じてもらいたい。それが岡崎で学びたい、働いてみたい、住んでみたいというきっかけになるのではないだろうか。

【参加者Ｔ】

・52年住んで岡崎は本当に素晴らしいまちだと感じている。昨今、空き家が増えている。私も含めて都会に出たら帰らない。岡崎には若い人が仕事を得て、子育てをしたいと思えるような良いところがたくさんある。それを皆さまに発信してほしい。子どもたちが基本なので、子育てしやすい環境づくりも大切だ。

・バスで通り過ぎるだけでは魅力は伝わらない。空き家を活用して宿泊していただき、市民と触れ合えるように参加型観光を提案したい。

【参加者Ｕ】

・愛知環状鉄道線の中岡崎駅という駅名を、八丁味噌蔵にしてほしい。やはり岡崎は味噌。『純情きらり』出演者の手形を通り沿いに並び替えれば、皆さんが集まりやすいのではないか。

・桜城橋が完成した。桜城橋を歩けば、竹千代誕生から江戸城まで家康75年間の生涯を一貫性を持って勉強できるように、案内板やガイドを置いてほしい。

４．総括

【高橋教授】

・全体をまとめて大きく２つに分けられる。１つは、地域を良くしていく必要性。市長が「住んでみたいまちに繋げていきたい」とおっしゃった。そのためには土地の名前を知らないわけにはいかない。しっかりとプロモーションしていきたい。さらに地域との関わりを全く持たずして、岡崎に住みたいとは言えない。『どうする家康』をきっかけに、岡崎

を知って体験していただきたいと思う。

・２つ目は、デジタルに関心を持つことだ。複数言語の案内板設置は景観的な問題があるが、スマートフォンでは写真を撮れば簡単に翻訳することができる。本日出たご意見・ご要望全てに応えることは難しいかもしれないが、AI技術でかなりの範囲をカバーできる。皆さまのご意見をどこまで反映できるのか整理していきたい。

【市長】

・市民の皆さまには、ぜひ積極的に触れ合いの場に参加してほしい。心優しくフレンドリーな方々だと分かることで、住んでみたいという気持ちに繋がる。トリップアドバイザーという世界最大の観光口コミサイトで最も重要なキーワードが“フレンドリー”である。

・第４回目も建設的で中身の濃いものとなった。本日の記録をよく読み直し、一つひとつのご意見を形にしていくことが私の役割である。今後も見守っていただき、さらに声をお聞かせいただきたい。

【司会】

・今回の内容については、後日ホームページなどで広く周知することで皆さんに市政への関心を高めていただき、より良いまちづくりへ繋げていきたい。

（了）